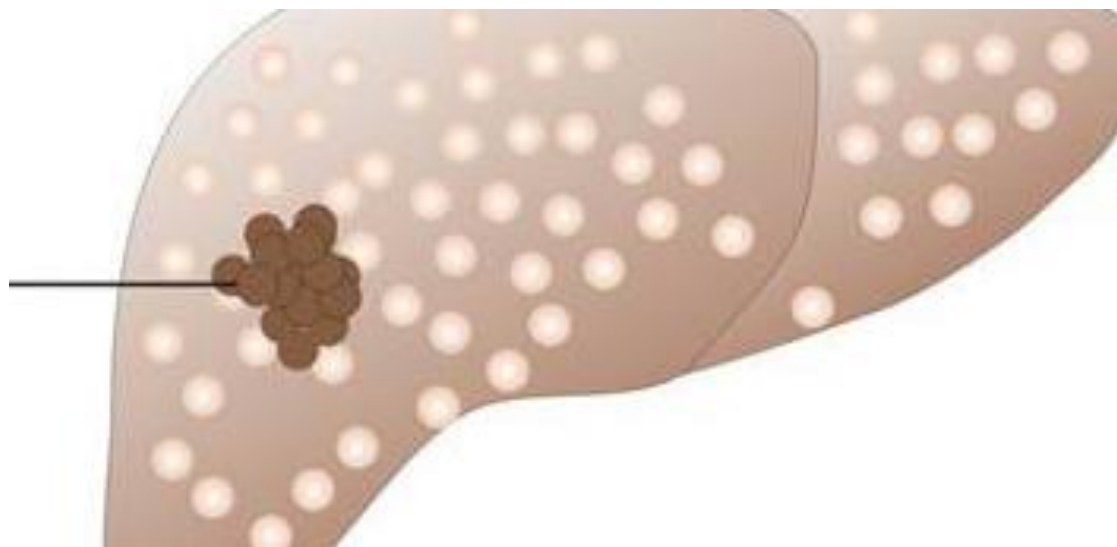


肝臓の過剰な鉄が肝臓がんを引き起こす

九州大学の研究グループは、肝臓の過剰な鉄が、肝臓がんの発がんを促進するメカニズムを解明したと発表。研究成果は、「Journal of Experimental Medicine」誌に公開されました。



研究グループは、細胞内の鉄の量を制御しているタンパク質「FBXL5」による鉄コントロールの異常が肝臓がんの発症に関係していることを明らかにしました。FBXL5を欠失した肝臓では大変強い酸化ストレスが生じており、これが遺伝子にダメージを引き起こしたり、肝臓の炎症を促進したりして、最終的に発がんを促進することがわかりました。



さらに、FBXL5はIRP2というタンパク質を分解して機能を発揮することが知られていますが、FBXL5を欠失することによる肝臓の鉄の過剰と発がんの促進はIRP2の蓄積が原因であることが示された。そのため、今回の研究成果は、IRP2の働きを抑えて鉄の過剰を防ぐことで肝臓がんを予防・治療できる可能性を示すものとなります。

